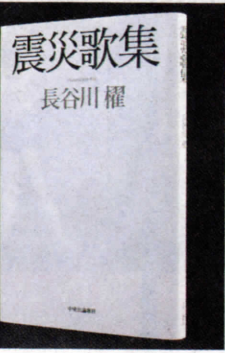


評・三浦 佑之 (古代文学研究者)  
立正大教授

まず興味をもったのは、今回の震災を、俳人である長谷川權がなぜ短歌に詠んだのかということ。「荒々しいリズムで短歌が次々に湧きあがった」と言うが、その刹那、言葉は

## 私の心、あなたの心

が口をついて出たのである。



中央公論新社  
1100円

俳句を選ばなかった。そこに短歌という定型の本質があるのだと思う。

時を隔てた映像なら見たことはある。今回のが今までと違うのは、凄まじい津波がライブとしてテレビ画面に溢れ続けたことだ。それを見た人は誰も、心を失くし言葉を忘れてへたり込む。そして、その先によくやく浮かびあがった心を、言葉として結ばせるのは短歌しかなかった。

「かりそめに死者二万人などといふなかれ親あり子ありはらからあるを」「降りしきるヨウ素セシウム浴びながら変に落ち着いてゐる我をあやしむ」「火の神を生みしばかりにみほと焼かれ病み臥せるか大和島根

は」——誰にも詠めそうな伝統短歌(和歌)で、内容は共感しやすい。

抒情と定型を本質とする短歌は、この列島に住む人々が見いだした、おのれの「心」を言葉にできるゆいいつの方法だった。だから句作を本職とする長谷川ですら、五七七七七が口をついて出たのである。

同じく定型表現でも、三句しかない俳句はまっすぐに心に向き合うことを避けようとし、五句の短歌は自らの思いを歌おうとする。しかも定型であるゆえに、表現された「心」は私の心であるとともに、あなたの心にも重なる。ということは類型化しやすく共振しやすいわけで、本書の歌々も、いずれは、作者未詳歌「読み人知らず」へと昇華するだろう。そこが、個性を前面に出したい現代短歌や現代詩、あるいは小説とは根源的に違うところである。

映像を眺めているしかなかった人の無力感をどのように掬い取るか、今はまだ声など出せない被災者の心と言葉を、どのように拾いあげ遺してゆくか。さまざまな手段があってもいいが、定型であるという点で、短歌は有力なツールの一つになるというところを、本書は教えている。

◇せがわ、かい 1954年、熊本県生まれ。俳人。句集『虚空』で読売文学賞。本紙朝刊に詩歌コラム「四季」を連載。